

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第113号 2024年5月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

| | | |
|---|-------|----|
| コラム 博士論文完成までの20年間を振り返って | 田中 智子 | 2 |
| コラム こもれび博物館の活動紹介 —「いのちの便りを未来へ届ける」を事例に— | 八田 友和 | 7 |
| 体験的文献紹介(62) —新たな中等教育史研究方針をたてる— | 神辺 靖光 | 11 |
| 国の1986(昭和61)年度以降の高等教育計画について — 大東文化大学での臨時定員増の受け入れ — | 谷本 宗生 | 15 |
| 大正時代の女子高等教育(68) 英和女学校 — 高等科を設置 | 長本 裕子 | 18 |
| 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(2): 進学案内書から分かること | 吉野 剛弘 | 23 |
| 刊行要項(2015年6月15日現在) | | 27 |
| 短評・文献紹介 | | 28 |
| 会員消息 | | 30 |

コラム

博士論文完成までの 20 年間で 振り返って

たなか さとこ
田中 智子

(神奈川大学資料編集室)

2024年3月22日、晴れて博士の学位(社会科学)を手にすることができた。筆者がお茶の水女子大学大学院の博士後期課程に入学したのが2004年4月のことであるから、実に丸20年かかったことになる。

この間、結婚や出産など、研究活動を中断しなければならないような大きなイベントがあったわけではない。なのに何故20年もかかってしまったのだろうか?以下、本ニュースレターとの関係をふまえ、反省と自戒、そして感謝を込めつつ、博論完成までの20年間の自身の研究活動を振り返ってみたい。

1. 博士後期課程入学から退学まで(2004-12年)

筆者は戦後の大学学生自治会の形成過程を研究テーマとしており、修士論文では、京都大学の学生自治組織である同学会の成立について、京都大学大学図書館に所蔵されている同学会関係資料を用いて執筆した。博士後期課程に入学した後、修士論文の内容の一部を教育史学会で発表し投稿するというのが所属ゼミの慣行となっていたため、筆者も2004年に初めて教育史学会大会で報告し、『日本の教育史学』に投稿した。この時は掲載されなかったが、翌年再度発表・投稿して掲載されている(『日本の教育史学』第49集)。

ここまでは順調すぎるくらい順調であったが、その後完全に行き詰まってしまった。修論ではよい資料に恵まれたものの、戦後間もない頃の資料、しかも学生関係のものはそう多くは残っていない。各大学に問い合わせをするなどして、資料を探す日々が続く。しかし、どこに問い合わせてもよいかわからない。京大のことを取り上げたのであれば東大のことも…と思い、本ニュースレター世話人である谷本宗生氏が当時所属していた東京大学史史料室(現・東京大学図書館)に資料閲覧に伺い、戦中戦後の時期の総長である内田祥三の資料などを見せていただいたが、東京大学の学生自治会そのものの資料は所蔵されていなかった。

その後も東大自治会関連の資料を探しつつ、ゼミの先輩の紹介で、戦後東大の学生運動に関わった方々への聞き取り調査を行った。1人に聞き取りをしたら、その方に友人を紹介してもらう方式で、4人の方の聞き取りを行うことができた。内1件の聞き取り記録は、谷本氏にお願いして、東京大学史史料室の紀要に2回に分けて掲載していただいた(『東京大学史紀要』第29・30号)。

東大自治会関連の資料は相変わらず見つからないままであったが、東大駒場博物館に第一高等学校寄宿寮の記録が所蔵されていることが判明した。それらを用いて、戦後の一高寄宿寮の寮自治の変容等についてまとめ、2008年に教育史学会で発表・投稿し、『日本の教育史学』に掲載された(第52集)。所属大学では、学位論文執筆の条件は査読誌論文2本以上であったため、これで条件はクリアした。しかし、だからといって博論が書けるというものではなく、京大と一高だけでは確実に事例不足であった。一次資料はないものの、とりあえずは『東京大学新聞』等の資料とインタビュー記録や回顧録を用いて、東大の事例についてまとめ始めた。博士課程に在籍できる期間も残り短くなっていったため、それらと京大・一高の論文とを合わせて、学位論文とすることを試みた。

博論執筆の一方で、筆者はある思いを抱くようになっていた。それは調査の過程で訪れた京大文書館や東大史料室など、大学アーカイブズに対する興味・関心であり、いつかはそういった機関で仕事がしたいと思うようになった。自分自身が資料の搜索で悩んだことから、大学に関係する資料の整理・保存・公開を業務とする大学アーカイブズへの関心が高まっていった。そのような中、2011年の暮れのことであったが、思いもかけず立教大学立教学院史資料センターへの就職話をいただき、翌年3月に8年間在籍(内3年は休学)したお茶の水女子大学大学院を退学し、博士論文は就職後に執筆・提出することにした。

2. 就職・転職と「路線変更」(2012-18年)

2012年4月、立教の資料センターに入職した後も、引き続き博論の執筆は続ける予定であったが、実際のところほとんど進まない状態であった。仕事は決して多忙であったわけではないが、就職したことによってある種の安心感が生ま

れ、糸が切れたようになってしまったのである。退学後3年間は課程博士扱いとなるため、その間に提出するつもりでいたのだが、結局それも断念してしまった。

仕事上では、全国大学史資料協議会に機関会員の一人として参加するようになり、全国にたくさんの大学アーカイブズ機関があることを知る契機となった(会員校だけで約100機関)。また、他機関とのやり取りの中で、学習院大学大学院にアーカイブズ学専攻があり、平日夜間と土曜日に開講されていることを知り、2015年に試験を受け、修士課程に入学した。ここへ来て、学生自治会史研究を完全に中断し、アーカイブズ学へ「路線変更」してしまったのである。

学習院入学と同じ頃、本ニュースレターが創刊され、筆者も誘っていただいた。「何を書いてもよい」という世話人の富岡勝氏の言に甘え、職場である立教学院史資料センターの所蔵資料を紹介する、という連載を開始した。かつて、大学院生だった自分が大学アーカイブズというものを知らず、所蔵資料の照会をするにも苦労した経験から、大学アーカイブズとそこにある資料について知っていただきたいという気持ちから始めたものである。

2016年には職場が立教から早稲田大学大学史資料センターに変わった。大学アーカイブズ機関の職は多くの場合任期制のため、3年から5年の間に次の仕事を見つけて転職しなければならない。転職と引っ越し、二度目の修士論文の執筆が重なり、大変な1年となったが、何とか大学アーカイブズ機関に関する修士論文を書き上げることができた。学習院修了後は、本ニュースレターにて、「教育史研究のための大学アーカイブズガイド」という連載を開始し、大学アーカイブズ機関の紹介に努めた(が、現在は休止している)。

また、職場の所蔵資料の中に終戦直後の部科長会(現在の学部長会)の記録や、当時の学生部長の資料があることを発見し、それらを用いて早稲田大学の学生自治会に関する論文を書き、2018年に職場の紀要に寄稿した(『早稲田大学史記要』第49巻)。

3. 「三度目の正直」とコロナ禍、二度目の転職(2019-24年)

2. で述べた通り、就職・転職、アーカイブズ学への「路線変更」などによって、博士論文の執筆はすっかり忘却の彼方に消えてしまっていた。それを呼び起こすきっかけとなったのは、2019年6月に開催された第1回「ニューズレター・コロキウム」である。会の詳細は本ニューズレター第55号を参照していただきたいが、ここで富岡氏の旧制中学校の生徒「自治」研究の集大成の報告を聞いたことにより、自分も大学学生自治会研究の集大成を博士論文としてまとめたい、という気持ちが次第に高まっていった。

しかし、ここまで5年以上のブランクがあったため、それ以前に何をどこまでやったのか、思い出すだけでもひと苦勞であった。夏休みを利用して、過去の論文データや資料を掘り起こして、再び博論構想を練った。就職時に一度、課程博扱いの期限を前に一度断念しているため、これで「三度目の正直」となる。前年に早稲田の学生自治会についての論文をまとめていたことから、早稲田を事例の一つに入れることとして、総論として明治期から第二次大戦後までの学生自治組織の系譜、各論として東大・京大・早大の戦後の学生自治組織の成立と初期の活動、という二部構成で博士論文を執筆することにした。

だが、実際に書き進めていく段では、いろいろな障害があった。まずは2020年のコロナ禍である。同年4月初めから7月頭までの3か月間、在宅勤務を強いられた。勤務時間以外は自由であるし、通勤もない分時間的余裕はあるはずなのだが、図書館にも行けないため、なかなか執筆を進めることができなかった。6月になって、ようやく国会図書館が抽選による入館を認めてくれたため、憲政資料室に行って、CIE 会見録のうち、学生自治会に関係するものを収集し、英語は不得手であったが、自分で少し翻訳を進めていった。

この年の夏、科研費の研究活動スタート支援に採択され(20K22222)、まとまった額の研究費を手にすることができた。これによって、東大の大学院生であった猪股大輝氏(本ニューズレター会員)を研究補助者として雇い、主にCIE文書の収集・翻訳の続きをやっていただいた。猪股氏は新制高校の生徒自治が専

門であり、CIE 文書に明るいため、たいへん力になった。その成果の一部は教育史学会で発表・投稿した後、『日本の教育史学』に掲載された（第 65 集）。

しかしその後も、業務の多忙などで執筆活動が中断してしまうことがしばしばあり、そのたびに切れた記憶とやる気の糸をつなぎ直す必要が生じた。さらに大きな障壁となったのは、二度目の転職である。2022 年度末で、早稲田の資料センターの任期が切れてしまったのである。幸いにして、現在の職場である神奈川大学資料編纂室に拾っていただいたが、当時住んでいた埼玉県所沢市からは片道 2 時間の距離である。ここへ来て博論完成に黄色信号が灯ったのであるが、もう一つの問題があった。2023 年度末での指導教授の定年退職である。遠距離通勤一途中で断念して転居一もあり、なかなか厳しい状況であったが、この機会に博論を提出しなければ、おそらく一生出すことはないだろうと思い、何とか執筆を続けた。結果、満足のいく出来ではなかったが、何とか 20 年越しに博論をまとめ、念願の博士の学位を手にすることができた。

以上、筆者が博士課程に入学してから博士の学位を手にするまでの、20 年間の研究活動の紆余曲折について述べてきた。決して自慢できるような内容ではないし、もう少し早くどうにかできなかつたか？という思いは今でもある。しかし遠回りをした分、知識の幅も広がり、論文に厚みと深みが増加したようにも思う。仮に博士課程に在籍しているうちに提出できていたとしたら、博論は今よりも数段薄っぺらいものになっていただろう。これから博論を提出予定の研究者には、筆者の例を反面教師としつつも、後悔のないよう執筆活動を進めてほしい。

最後になったが、文中で述べた通り、本ニューズレターの会員諸氏からは、筆者が研究活動を続けるにあたって、様々なかたちで協力、激励、あるいは刺激をいただいた。紙幅の都合から全員の名前をあげることはできないが、この場を借りて厚く御礼を申し上げる。

コラム

こもれび博物館の活動紹介 –「いのちの便りを未来へ届ける」を事例に–

はった ともかず
八田 友和

(こもれび博物館／クラーク記念国際高等学校)

はじめに

本稿では、(任意団体)こもれび博物館がおこなっている、「いのちの便りを未来へ届けるプロジェクト」(以下、「いのちの便りプロジェクト」と表記する)の概要を紹介する。

いのちの便りプロジェクトをおこなった、「こもれび博物館」¹⁾は、日清戦争から太平洋戦争が終わるまでに国内外を行き交った軍事郵便や絵葉書の収集・保管・調査研究・教育普及活動に取り組む任意団体である。

軍事郵便や絵葉書は、博物館や研究者といった組織・専門家の努力により保存や活用が行われてきた。一方で、誰にも発見されることなく、家屋や蔵などに眠っているケースも多く、常に散逸と廃棄の危機にさらされている資料ともいえる。そこで、「こもれび博物館」では、軍事郵便そのものはもちろん、当時を生きた人々の記憶を未来に継承する活動に取り組んでいる。

2. こもれび博物館

こもれび博物館は、兵庫県明石市に事務局を置く任意団体である。社会人2名で細々と活動している(活動日は不定期である)。なお、「博物館」と名乗っているが建物や施設が存在するわけではない。活動場所としては、兵庫県芦屋市・西宮市・明石市内に加え、オンラインでの打ち合わせ、活動なども行っている。活動日や活動内容、研究成果については、こもれび博物館のサイトで紹介している。

2) また、年に1回のペースで『こもれび博物館年報』(ISSN 2759-1190)を発行している。年報第1号は、こもれび博物館のサイトから閲覧が可能である。

3. プロジェクトの概要

ここでは、いのちの便りプロジェクトの概要について整理する。

(1) 名 称:いのちの便りを未来へ届けるプロジェクト

(2) 期 間:2023年9月1日～現在

(3) 内 容:①軍事郵便の収集、読み解き、記録、保管

②軍事郵便を活用した通信制高校での授業実践

③学会・研究会等での研究成果の発表・公開

ここでは、「①軍事郵便の収集、読み解き、記録、保管」「③学会・研究会等での研究成果の発表・公開」について紹介する。なお、「②軍事郵便を活用した通信制高校での授業実践」に関しては、拙稿「博物館機能の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く実践(『リカレント研究論集』第4号, 2024年, pp.76-89)」で紹介している。そちらを参照いただきたい。

① 軍事郵便の収集、読み解き、記録、保管

まず、個人が所有する軍事郵便を散逸と廃棄の危機から救い、こもれび博物館の資料として収蔵するために、インターネット上のショッピングサイトにて軍事郵便の購入を行った(2024年1月時点で、約300枚の軍事郵便、数百枚の絵葉書を収集した)。次に、収集した軍事郵便の読み解きを行った。メンバーによる読み解きはもちろん、筆者が勤務する通信制高校の生徒および教職員とも読み解きを行っているため、延べ150人以上が軍事郵便と向き合ったことになる(2024年度も多くの方が軍事郵便と向き合える機会を提供していく予定である)。そして、軍事郵便の読み解きを行う際、必ず資料の記録もとっている。具体的には、「資料名称・作成年・作成者・形態・法量・数量・内容」などの情報を記録している。現在は、軍事郵便に留まらず、日清戦争から太平洋戦争までの期間に作成された、「慰問作文」や「出征兵士を送る送辞」なども収集、保存の対象として活動している。

② 学会・研究会等での研究成果の発表・公開

こもれび博物館では、研究成果を積極的に外部に発信している。2023年度は、「超異分野学会2023香川フォーラム」や「関西教科教育研究会紙上研究発表大会」において軍事郵便を題材にした教材研究・授業実践等について報告している。また、こもれび博物館が所蔵する資料の目録を作成し、事務局に備えることで、会員や関係者が閲覧・利用できるようにしている（個人情報保護のため、インターネット上での公開は行っていない）。

今後も、積極的に情報や研究成果の公開を行っていききたい。

4. 今後の展望

ここでは、今後の展望を思いつくままに列挙していく。

- ・いのちの便りプロジェクトを引き続き行っていく。
- ・資料目録などの作成
- ・軍事郵便だけでなく、同じ時代に作成された資料の収集や保管を行う。
- ・教職課程を履修する学生へのアプローチ（講義、教材研究など）。
- ・他団体と連携を図りながら、所蔵資料の展示・紹介を行う。

特に「教職課程を履修する学生へのアプローチ」を充実させたい。学生を対象にした講義（出前授業）や学生との教材研究、指導案の作成などを行うなかで、教員の卵に軍事郵便やそこに込められた思いを知ってもらう機会を創出したい。

5. さいごに

本稿では、こもれび博物館が行う「いのちの便りプロジェクト」の概要について紹介してきた。これまで、会員や生徒、教職員など、様々な人を対象に軍事郵便の読み解きに取り組んでもらった。勤務校でもいくつかの学年・クラスで取り組んだが、いずれの場合も全員が資料と真剣に向き合っていた。もちろん、最初は当時の郵便物を触っていることに「驚き」「感動」している姿がほとんどであったが、読み進めていくにつれ、その表情が真剣になっていくことが確認できた。読み

手に直接訴えかける魅力をもつ軍事郵便を、その思い出とともに、多くの人に伝えていかなければ…と決意を新たにした瞬間であった。

【謝辞】

本研究を行うにあたりまして、鈴木康二氏、八田眞榔氏にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

【註】

1) こもれば博物館公式サイト(2024年2月29日確認)

<https://sites.google.com/view/komorebi-museum/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

2) 前掲サイトを参照。

【参考文献】

- ・新井勝紘「「軍事郵便文化」の形成とその歴史力」『郵政資料館研究紀要』第2号、2011年、日本郵政株式会社郵政資料館、pp.1-17
- ・新井勝紘「軍事郵便のもつ“歴史力”に魅かれて—その収集・保存・公開・研究について—」『昭和のくらし研』No.16、2018年、昭和館、pp.7-22
- ・小野寺拓也『野戦郵便から読み解く「ふつうのドイツ兵」—第二次世界大戦末期におけるイデオロギーと「主体性」』山川出版社、2022年
- ・八田友和「博物館機能の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く実践」『リカレント研究論集』第4号、2024年、pp.76-89
- ・国立歴史民俗博物館(編)『佐倉連隊にみる戦争の時代』2006年
- ・国立歴史民俗博物館(編)「特集 軍事郵便と戦争・兵士」『歴博』第189号、2015年

体験的文献紹介(62)

－ 新たな中等教育史研究方針をたてる －

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

兵庫教育大学教授に就任するに際し、今後10年にわたる教育史研究の方針を立てようと思った。これまでの経験からおよその方針は醸^{かも}されていた。一つは明治初年から諸学校令期を経て大正・昭和初期(第2次大戦以前)までの中等学校制度を詳細に調べて、その経緯や変遷を画く。第二は中学校を軸に類似の中等学校を地方別、府県別に調べて、その実態を記述する。第二は新規の大事業であるが、第一の近代日本中等教育史研究は学位論文以来、自らに課した課題であるから一人で生涯やり続けねばならない。これをやりとげるための基本資料や先行研究は早稲田大学図書館の書庫に眠っているし、私はその眠り場所まで^{そら}語んじている。兵教大は開校以来、毎週土曜日は休校同様で授業がなかったから、金曜日の授業が終ると東京帰りの帰路につき、土曜日の朝から法学部の教育学概論、第一文学部、第二文学部(夜学)の日本教育史を講じ、日曜日は一日中、図書館の教員研究室でわが近代日本中等教育史研究に没頭した。はじめは月曜日に兵庫県の宿舎に帰ったが、月曜日に私の授業がなく、諸会議も火曜日～金曜日に集中しているので次第に金帰火来が習慣になった。

第二の中等学校、府県別地方別実態調査は大事業である。一人ではなし得ない。同志とグループ研究できないものか、悩んだ。

昭和61年5月のことである。福島県郡山市の郡山女子大学で全国地方教育史学会が開かれる前夜、駅近くのビジネスホテルに泊った。その夜、ロビーで偶然、九州大学の^{こおりやま}新谷恭明氏、東京女子大学の米田俊彦氏、国土館大学の四方一弥氏、東京女子大学定年退職後、郡山女子大学教授になった名倉英三郎氏が顔を揃えた。私は偶然ながらチャンスと思ったので中等教育史研究会創設のことを話したら、全員大賛成であった。早速、研究会結成の段取りとして、7月、東京の私学会館で初の中等教育史研究会を開き、10月、慶応義塾大学で行われ

る第30回教育史学会終了後、本会を発足させようと予定を立てた。そして予定通りの順序を踏んで、昭和61年10月、中等教育史研究会が発足し、推されて私(神辺)が会長になったのである。

ここに至るまで私が驚嘆したのは新谷恭明氏と米田俊彦氏の研究者交友の多さと強力さである。各地に在って活躍する優秀な若手研究者を立ち所に集めたのである。これで各地に盤踞する中等学校^{ばんきよ}を府県別・地方別に調査・研究できる目鼻^{めはな}がついた。

さらなるもう一つの企画は幕末維新时期学校研究会である。私はこれまでの明治維新时期の教育史研究で藩校や私塾が仮の中学になる例を沢山みてきた。さらに突っ込んで言えば、`藩校`とか`私塾`とかの語彙^{ごい}は現実にはなかったのである。これらの語彙は明治以後教育史研究上つけた名称で、江戸時代は明倫堂とか時習館とか藩校の建て物=教場の名称を、私塾であつたら〇〇塾とか〇〇舎、〇〇庵などと同じく教場の名称を呼んでいたのである。それが維新後、急速に小学校や中学をつくらなければならなくなって、間に合わせに従来の藩校や私塾・寺子屋を中学、小学校に見立てて開校したのである。そこで旧来の学校に統一的な名称をつけなければならなくなり、旧藩が運営した学舎を藩校、個人が営んだ学舎を私塾・寺子屋と名付けたのである。近世江戸時代の武家の学校、庶民の学び舎^やを呼称する場合、わかり易いので、これが定着した。

さて以上のようなわけで、これから府県別地方別に中学校の成り立ちを検討するには明治維新以後では不十分なので幕末まで遡^{さかのぼ}って藩校や私塾の開校、開業を明らかにしなければならない。これを検討し研究するために幕末維新时期学校研究会を創設した。私も勧誘に励んだが、九州大学の^{さかのぼ}新谷氏の勧誘で多くの研究者が集った。佐賀大学教授・生馬寛信氏、宇都宮大学教授・入江宏氏、日本大学教授・川本享二氏、和洋女子大学教授・関山邦宏氏、名古屋大学教授・高木靖文氏、仏教大学教授・竹下喜久男氏、国立教育研究所員・橋本昭彦氏等の面々である。ここでも私は推されて研究会の代表になり、会員相互の研究を報告し合う討議をくり返し、平成3年、4年の2回、研究報告書を公刊した。これは後に平成7年度・文部省研究成果公開促進費の交付を受けて多賀出版社

から出版された。以上の研究は中学の淵源を幕末または近世にまで遡らせようとするものであった。

以上述べた通り、兵庫教育大学教授に就任するに当り、私の教育学、日本教育史講義の方針は決った。神辺流の新鮮な中等教育史を軸に初等教育、高等専門教育を巻き込んで展開する。けれども大学院学生の、特にゼミ学生の授業、指導はどうしよう。これまでも内密に頼まれて大学院学生の論文指導をしたことはある。概ねよくない。専門書を2、3冊読んで理論的なことを言うが、教育の実態を知らないから空虚な理屈で終る。中にはアルバイトで国語・英語・数学などの非常勤講師をしている者もあったが、これはまだ若干よろしい。要は学校教育の実態を知らない若者には教育学、教育史の研究はできないということである。これに対し、わが兵庫教育大学の大学院生は学校教育の実態を十分に知り尽くした中堅幹部である。彼らの教授者たる私は緊張せざるを得んではないか。私は彼らの修士論文作成指導に全力を傾けようと誓った。

その一方法、手段として彼らの母校、或は勤務校、在地の学校の学校史をつくることをすすめた。私のこの狙^{ねらい}は的中した。彼らは修士論文をつくる義務を知ってはいたが具体的なテーマを持たず、不安だったのだろう。私の提案に即応した。^{とっさ}咄嗟に私は私の府県別、地方別の旧学校調査と大学院ゼミ学生の学校調査を連動させようと思い、手はじめに足元の兵庫県下旧学校調査を提案。大学院神辺ゼミ学生数名は通学用自家用車を連ねて県下旧学校調査に走り廻った。まず姫路市にある藩校資料、次いで神戸の豪商・北風荘右衛門がはじめた郷学校、また池田草庵の私塾^{せいけい}・青谿書院などを見学したりした。学生たちは興味関心を持ったが、資料調査として成功したとは言えなかった。兵庫県は山陰山陽道の交わる所で他地方からの流入者が多い。そのためか各地に散在した旧跡は観光用に整えられていて、研究用の一次資料など見せて貰えない。最初の兵庫県下のゼミ旅行は成功とは言えなかった。

兵教大就任の2年目、昭和61年4月、新しい大学院生が私のゼミに加わった。彼らは学校資料探訪に強い関心を示したが、中でも愛知県豊橋の高校教諭で^{みかわ}あったS君は三河地方の教育の特異性を主張して資料探訪を強く願った。三河

は静岡県の遠江、駿河と一帯に三遠駿と呼ばれて東海地方を指す場合もある。また名古屋が位置する濃尾平野は美濃・尾張両国の平野という意味であろう。愛知県とは言うものの名古屋の尾張と三河は断ち切られた感がなくはない。三河地方の学校史資料調査をすることにした。

新幹線豊橋は特急ひかり号の通過駅であったから下車したことはなかったが、名古屋や静岡とは別な繁栄を感じる街であった。産業も盛ん、学校や教育施設も多く充実していた。あらかじめS君が手配してくれたのであろう。当地の教育史研究者が交々立って当地特有の学校の話の話を聞かせてくれた。私が非常な関心を引かされたのは、いまだ府県立中学校が出揃わない明治十年代にこの地に宝飯郡立中学校ができたことである。当地出身の愛知県会議長・武田準平、宝飯郡教育会議議長・加藤幸三郎、宝飯郡長・竹本長三郎三名の呼びかけて宝飯郡民全員が賛同して郡立中学校をつくったのである。中学校形成史の研究を志す者として、これを見過ごすことはできない。豊川市立国府小学校所蔵の「郡立中学校」に関する一次史料を複写させて貰い、近藤恒治著『三河における明治期の郡立中学校 — 愛知県宝飯中学校について』（昭和51年刊）、山田東作・竹田三夫共著『三河最初の中学校』（昭和56年刊）、豊川市立国府小学校『国府小百年』を買い求めて帰路に就いた。

直ちに「明治前期・中学校形成史」の一環として「郡内全町村立宝飯中学校」の執筆をはじめた。当時、制度上「郡立中学校」はなかったので、注意を引くため、この題名にしたのである。全国地方教育史学会紀要『地方教育史研究10号』に「教育令期における愛知県の町村立中学校 — 郡内全町村立宝飯中学校について」の題名で記載されている。

愛知県三河地方への学校史資料調査は①大学院ゼミ生の修士論文作成のための資料調査と②私自身の中学校形成史研究のための府県別調査の関連性に一定の目安をつけた。以後、私は対象地域を動かしながら大学院生の修士論文指導と「明治前期・中学校形成史」研究を充実させてゆくのである。

国の1986(昭和61)年度以降の高等教育計画について

— 大東文化大学での臨時定員増の受け入れ —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

18歳人口が1992(平成4)年にピークに達し205万人となることを踏まえ、文部省は昭和60年代計画(1986年度以降の高等教育の計画的整備について:1984年6月)に基づき、高等教育機関の質的充実と併せ、恒常的定員増と期間を限った定員増(臨時定員増)による量的充実を推進することを強調したのである。1984(昭和59)年6月、国の大学設置審議会大学設置計画分科会は、昭和61年度から平成4年度までの7年間の新高等教育計画を示したのであった。1986(昭和61)年度以降に、18歳人口が第2次ベビーブームで1992(平成4)年に205人に達し、93(平成5)年度以降の急減も考慮しながら、量的な定員整備をどのようにはかるかが課題とされ、高等教育機関の臨時定員増を計画的には4万4000人と想定され施策がなされたのである。

実際、1992(平成4年度までの臨時定員増は11万2568人となり、恒常的な定員増も7万8148人となり、合計で19万716人の入学定員の増加が実施されたのであった。この1986年から1992年の7年間で、我が国の高等教育関係者らから見て、「大学にとっては、“天国”であり、“バブルの時代”でもあった」とされ、「ゴールデンセブンの時代」とも称されている(佐藤龍子「大学『ゴールデンセブンの時代』と臨時的定員政策を考える」同志社大学人文科学研究所『社会科学』第78号、2007年所収)。文部省は、この時期の大学進学希望者の急増を、恒常的な定員の増加に加えて臨時定員増によって乗り切ろうとしたといえよう。18歳人口が1992(平成4)年をピークとして急速に減少して行くことも想定されていたために、急増急減期に臨む行政政策的には、期間を限定したかたちの臨時定員増で対応したことになる。文部担当行政としての言では、「昭和61年度以降の高等教育計画」について、高等教育のさらなる質的な充実として、

「時代の動向を反映して、情報科学・情報処理や国際文化・国際教養等今後の人材養成の需要の大きい分野の学部、学科の新増設が行われた」と評価し、さらに女子学生の高等教育機関への進学率が男子を上回って来たことも、この段階における特徴であったとしている（「高等教育の計画的整備」文部省『学制百二十年史』1992年所収）。

本学・大東文化大学でも、このような情勢下で恒常的定員増の入学定員として、1983（昭和58）年4月には文学部中国文学科100名→150名、文学部英米文学科100名→130名、経済学部経済学科300名→450名、経済学部経営学科200名→300名、外国語学部中国語学科80名→120名、外国語学部英語学科120名→180名とした。そして続き、1984（昭和59）年6月末に収容定員の増加につき申請していたが、同年12月に、「入学定員を厳守すること」として認可され、85（昭和60）年4月にも、法学部法律学科200名→250名とした（大東文化大学収容定員関係学則変更認可申請書）。本学法学部では、設置以来10周年を経過して、志願者数も78（昭和53）・79（昭和54）年度の4100余名をピークとして、1980（昭和55）年度以降は、地方入試を廃止するなどして入学試験回数も減り、志願者数は3000名前後で安定推移している。入学定員に対する入学者数の比率を見ても、77（昭和52）年度までは2～2.8倍（400～560名）程度であったものを、78（昭和53）年度からこれを漸減し、81（昭和56）年度以降においては、適正規模の学生数確保の計画を持ちながら、84（昭和59）年度までの定員（200名）との対応において、上限を入学定員の1.3倍程度に目標設定し、ほぼ予定通りの入学者数の比率動向を抑制することができたとしている。

加えて、86（昭和61）年度より文学部を除く3学部（経済学部・外国語学部・法学部）において、現定員を約1.4倍に増加させる、いわゆる臨時定員増の計画を本学としても申請し、85（昭和60）年12月付で認可された臨時定員増の入学定員によって、経済学部経済学科450名→600名、経済学部経営学科300名→400名、外国語学部中国語学科120名→180名、外国語学部英語

学科180名→270名、法学部法律学科250名→350名と定めた。その後も、本学では段階的な臨時定員増を行い、91（平成3）年4月には文学部教育学科100名→120名、法学部法律学科250名→300名、法学部政治学科100名→200名とし、92年4月には外国語学部中国語学科180名→200名、外国語学部英語学科270名→300名と定めたのである。この時期の臨時定員増の上位20大学はいずれも私立大学であり、大東文化大学は、臨時定員増720人で第14位に位置したことになる。この時期の臨時定員増は、数字の上から見ても、日本の私立大学が国公立大学と違って、18歳人口の急激な増加に対する特異な調整弁機能を果たしたことを物語るものであろう。本学・大東文化大学も、その一翼を役割として期待され十分に果たしたことになる。実際、大東文化大学としても、期間を付した収容定員増（臨時定員増）の受け入れをはかることによって、経営基盤の手助けとなり、教育・研究体制の整備充実に尽力することができたと考えられる。

大正時代の女子高等教育(68)

英和女学校一高等科を設置

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

明治15年11月、24歳のE.M.ブラウン女史が英和女学校第三代校長に就任した。ブラウンは、カールトン・カレッジを優秀な成績で卒業し、米国伝道会に選抜されて来日した。12月、クラークソン女史の構想で育てた卒業生12名の第1回卒業式が挙行された。1年後の16年10月、S.A.ソール女史が来日し、教頭のような立場で校務を行った。ソールは、ウェルズレー・カレッジ卒業後、カールトン・カレッジの予備教授として就任していた。創立者タルカットが日本の伝統・慣習を保持しながら伝道本位の学校運営であったのに対して、第二代校長のクラークソンは5年制課程の中等教育カリキュラムを整備し、教養本位の学校運営を行った。クラークソンが心労の末辞職した後、学校の根本方針が定まっていなかった。

日本政府は、幕末の列強諸国と結んだ不平等条約を改正することが悲願であり、その政策の一つとして15年、外国人の内地雑居を認めた。領事裁判権の撤廃を要請する一方、16年末、鹿鳴館を建設し、各国外交官や政府高官、それらの夫人や息女らを招き宴遊する欧化主義政策をとった。17年6月から始まったダンス等の影響で、婦人の洋装・洋髪が流行した。この鹿鳴館時代の欧化主義の影響は神戸にも及んだ。18年、創立10周年を迎えた英和女学校は、ブラウン校長、ソールら女性宣教師によってもたらされたリベラル・アーツ教育の理念として、身体・精神・靈魂の三者の一致調和した完全な人格の育成をめざし、キリスト教主義に基づく欧米式教育を授ける女学校として注目された。

ブラウン校長以下、ソール、山内松鶴、吉田作彌、卒業生7名が常勤していた。在籍生徒は100名を超え、その約半数が寄宿生であった。寄宿舎はすし詰め状態であった。17年夏から20年にかけて増築し、教室・寄宿舎・新講堂を整えていった。寄宿舎の増設のために九鬼隆義や神戸基督教会原田^{たすく}助らが委員とな

って募金に協力した。学校とその付近の風致が一新され、欧化主義全盛の追い風を受け、美しいキリスト教女学校は人目をひいた。

高等科が始まる

18年、予備科を廃止し、5年の普通科(本科)の上に、1年制の高等科を置いた。19年、教育令改正により、小学校は尋常4年・高等4年の二段階となり、尋常4年は義務教育となった。20年、英和女学校は、本科を改めて予備科2年とし、尋常小学校卒業者を入学させた。本科を4年とし、高等科を2年制の課程に延長した。高等科には英文学、キリスト教証明論、地質学、動物学、孟子、論語という科目があった。一般の高等女学校以上の修業年限の課程を設け、教育内容の充実にも努めた。また、音楽教育が宗教指導に重要と考え、音楽担当教師を迎え、洋裁の授業を開始し、英語の授業時は教師も生徒も日本語を使わないなど、官立学校ではできない特色を出し、充実をはかった。名声が高まり、21年には創立以来の多数となり、在籍数193名に上った。23年には、高等小学校卒業を入学資格とし、本科4年、高等科1年とした。

米国のカレッジをめざして、3年制の新高等科を設置

23年7月、京阪神地区のキリスト教主義女学校の教師たちが大阪で協議会を開き、信徒の女教師を養成するカレッジを有する必要を確認し、英和女学校の高等科を拡充して充てるのがいいと意見が一致した。その結果、本科の4年を廃し、予備科2年、本科3年、その上に、3年制の高等科を設け、米国のカレッジ程度に充実させる方針を立てた。通年8年、これは当時女子の最高教育機関であった女子高等師範学校の卒業生より、1年長い学歴を有することになる。英和女学校予備科への入学資格は、当時、高等小学校卒業者となっていたから、小学校1年から高等科3年修了まで合計16年で、今日の6・3・3・4制の16年課程と同じ年数を必要とする。

このカレッジ構想は、その内容に見合う教授陣、校舎、その他設備が必要となる。経費の増大を恐れ、米国伝道会書記のクラークは難色を示したが、華北（現中国）から引き揚げた宣教師M.A.ホルブック女史が、“日本の大学が女子の入学を認めないので、米国に留学させるより仕方がないが、それには英和の卒業生が米国の大学に入学を認められるほどの完備した高等科を持たなければならない”と力説し、クラークも考えを改めた。ホルブックは、中部婦人伝道会会長のM.スミス夫人と協議し、1万ドルの募金を行うこととなった。また、マウント・ホリヨーク・セミナリーを卒業したホルブックは、特に理数科方面の教師養成に情熱を持ち、自身が理科教師として就任することになった。

24年1月、新高等科（3年制）が正式に発足した。『神戸女学院百年史 各論』に依り、新高等科の学課課程について述べよう。

新高等科の目的：英語または理科の教員養成

文科・理科

共通必修科目：修身（聖書）・和漢学・神学（3年のみ）・心理学（文科の2年、3年に教育学）・図画・裁縫・唱歌・音楽・体操

文科の必修科目：英文学・哲学（3年のみ）・理財学（1年のみ）

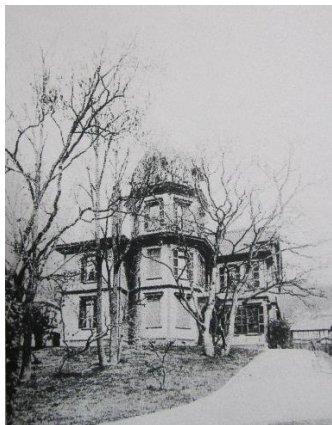
理科の必修科目：理化学・博物学

数学・歴史は、一部は文科・理科の必修、他は選択

聖書・神学と女学校独特の技芸的学科目を除けば、明治19年の文部省令「高等中学校の学科及びその程度」に規定するところと似ている。また、大正7年の高等学校規定による高等学校高等科の文科及び理科の学科課程にも通じるところがある。創立時代の伝道者養成学校の伝統は、聖書・神学（有神哲学）の必修に残っている。音楽（器楽）に週6時間も割くのは教会音楽に奉仕させるためであった。文科では英文学に主力を注ぎ、古代文学や言語学も加えて、英語で教授し、理科では物理・化学の実験を行うために特別の施設を整えた。

建物の増改築は第2期拡張を行った。22年7月、米国伝道会から1万2,000ドルを借り入れ、新敷地を購入し、4階建250坪の理科学館（26年10月完成）

と、3階建200坪余の音楽館（27年完成）を新築した。音楽専用の独立校舎としては日本最初のものであった。理科学館屋上の円塔と音楽館の尖塔は神戸の新名物となった。



理化学館
『神戸女学院の125年』より



音楽館
『神戸女学院の125年』より

ブラウン校長は25年11月、病気のため米国に帰り、27年3月の両館の奉堂式に出席できなかった。ブラウン校長が病に倒れた背景には22年から23年の日本の情勢があった。明治22年2月11日、大日本帝国憲法が公布された。同年10月、大隈外相が襲撃され、不平等条約改正談判は一時中止された。欧化主義が衰退し反動的に国粹主義が流行した。23年10月30日、教育勅語が下された。24年1月、キリスト教信徒である内村鑑三が教育勅語不敬事件を起こした。それを契機として、キリスト教と日本精神との不調和が問題視された。ブラウン校長は、世間を刺激しないためにも、23年11月28日、英和女学校で帝国議会開設祝賀会を開いた時、講堂の正面に両陛下の御真影を安置した。

ブラウン校長は、反動の風潮の中で、種々の施策に心を砕いたが、22年の条約改正談判中止以後、生徒数は減少した。200名に近づいた生徒数は24年には135名に減じ、以後かろうじて100名を保つにすぎなくなった。高等科・本科の生徒有志十数名が「一個伝道」を始めたが、それも旧道德に対する批判として

世人の印象に残り、英和女学校の「西洋かぶれ」と受け取られ、学校に対する不評を招く一因となった。ブラウン校長の苦悩は続いた。

そうした中で、25年6月、新高等科第1回生の卒業式の日、卒業生のうち9名が発起人となって、同窓会が設立された。卒業生累計169名を正会員、母校に修学したことのある者を会友、教職員その他の関係者を特別会員とし、毎年6月に大会を開くこととなった。年3回の機関誌『めぐみ』発行などを取り決めた。これは学校関係者を大いに勇気づけた。

24年春以来帰国して静養していたソール女史が回復して25年10月復帰した。ブラウン校長は、ソールに校務を預け、25年11月、10年ぶりに帰国の途についた。帰国後、エール大学に入学した。ゆくゆくは英和女学校の高等科の生徒を教えるためであった。しかし、病気が再発し、数か月で退学を余儀なくされた。その後静養に努め、30年3月、神戸女学院と改称した学校に戻ったが、またしても病気が再発して、国内で転地療養することになった。

参考文献

『神戸女学院五十年史』

『神戸女学院百年史』総説

『神戸女学院の125年』（1875～2000）

『神戸女学院のものがたり』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校(2):

進学案内書から分かること

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

前号から、進学案内書に掲載されていた予備校の情報を通して、戦前期の東京府の予備校の一端を解明していくことにした。今号では、進学案内書に掲載された予備校に関する情報を検討することで何が明らかになるかを考えていく。

進学案内書の情報を見れば、以下のようなことが分かるということは容易に想像できる。

学校名／所在地／目的／設置学科

設立者／創設年／教育課程／授業料

上段はすべての進学案内書に掲載されているであろう最低限の情報で、下段は比較的多くの情報を掲載する進学案内書であれば掲載していそうな情報である。目的や設置学科を見て入学試験の準備教育を実施していると思わせるものを予備校と認定し、その掲載の有無をたどっていけば、予備校の存廃が分かるということになる。今後さまざまな進学案内書を紐解いていくが、基本的にこの作業をしていくことになるのは言うまでもない。

一方、そのように予備校を認定していく中で、何が明らかになっていくのかということになると、時期によって違いがある。本稿では明治 30 年代以降の進学案内書を対象とすると前号で述べたが、明治 30 年代以降にあっても、時期によって明らかになるものに違いがある。

明治 30 年代は、入学試験の性質が定員まで受験生を絞り込むための道具と化した時期であり、それゆえに浪人生を収容する予備校が要請され始めた時期である。この時期の予備校については、私の博士論文で主として公文書を用いて東京府の予備校を中心にその様相を明らかにした。

私の博士論文に先がけて、竹内洋は『立志・苦学・出世』（講談社、1991）の30頁では「図 1-4 明治 30 年代前後の予備校設立ラッシュ」として明治 30 年代以降に設置された予備校を以下のように列挙している。

| | |
|------------------|---------|
| 国民英学会 | 明治 21 年 |
| 正則英語学校 | 明治 29 年 |
| 官立学校予備校（東京物理学校内） | 明治 33 年 |
| 研数学館 | 明治 35 年 |
| 正則予備学校 | 明治 35 年 |
| 開成予備学校（開成中学校内） | 明治 36 年 |
| 早稲田高等予備校 | 明治 36 年 |
| 京都予備校 | 明治 37 年 |
| 錦城予備学校（錦城中学校内） | 明治 38 年 |
| 中央高等予備校（中央大学内） | 明治 38 年 |
| 日本高等予備校（日本大学内） | 明治 39 年 |
| 明治高等予備校（明治大学内） | 明治 40 年 |
| 東洋高等予備校（東洋大学内） | 明治 41 年 |
| 東京高等予備校（法政大学内） | 明治 43 年 |

内容の一部に疑問が残る点もあるのだが、ここでは深入りしない。ここで問題にしたいのは、ここに掲載されているものの多くは、大正後期あるいは昭和戦前期まで命脈を保った機関だということである。

明治 30 年代の進学案内書を精査すると、受験準備を目的とした機関はここに掲載されているもの以外にも数多くある。しかしながら、それらの機関は明治末年頃の進学案内書で見かけることはない。明治 30 年代は入学試験の性質の変化にとまない、新たな予備校が要請された時期には違いないが、その揺籃期と称すべき時期であって、極めて流動性が高かった時期と評価することが適

当なのだろうと思われる。

一方、明治末年以降は、新設の予備校はあるものの、掲載される機関が比較的安定していく。マイナーなものは掲載しないという編集方針による可能性は残るが、それは進学案内書の史的制約によるものである。

そのような史的制約はあるが、以上のことから予備校の基本的な情報以外に、時期によって明らかにできることが異なるということが分かる。明治 30 年代頃は新たな予備校が収斂していく過程が明らかになり、それ以降は新設のものを包摂しつつ展開していく過程が明らかになるということである。

歴史研究の王道を行くならば、前の時期から順を追って明らかにしていくべきところではある。しかしながら、収斂していった結果についてはすでにある程度分かっているため、本稿では予備校の一定の収斂が確認できる明治 40 年代から分析を始め、最後に明治 30 年代に戻ってくるという順番で進めていく。これは大正期、昭和戦前期の情報が非常に少ない現状に鑑みてのことでもある。

進学案内書に掲載されているさまざまな機関のうち、どれを予備校として認定するかという点については、以下のような基準を設定しておく。

上級学校の入学試験の準備を主たる目的としている機関については、基本的に予備校と認定する。ただし、修業年限が 1 年半を超えるものについては、中学校の代替機関と見なして、予備校とは認定しない。1 年半というのは、高等学校をはじめとして一部の上級学校が 9 月入学であったことを考えてのことである。

上級学校の入学試験の準備を主たる目的としない機関については、受験準備のための学科等を設置しているものを予備校として認定する。いくつかの進学案内書を見た限りの話にすぎないが、明治期の一部を除けば英語学校以外にこのような機関はほとんどない。

次号からは、個別の進学案内書を取りあげて、そこに掲載された予備校の情報を明らかにしていくことにする。予備校やそれに類する学校を射程に入れていない進学案内書もあるので、そのようなものは除き、比較的積極的に扱っているものを検討していくことにする。

進学案内書の体裁は、時代が下るにつれて情報を淡々と示す形に変わっていくように見えるが、明治期の進学案内書は必ずしもそうでもないところがある。当時の状況を生々しく伝えてくれているという点を尊重し、次号からは進学案内書に掲載された情報をあえてそのまま復刻していくことにする。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

本年5月7日付の日経新聞(朝刊)に、コニカミノルタさんが、人工生成AIによる小・中学校(関西地域)での学習支援(チャット式)の実証研究を本年秋から開始し、翌2025年度からの事業化を目指すと報道されていました。導入されるAIは、あくまで問題の答えを生徒らに安易に教えることなく、ヒントや考え方を示唆するものといいます。コニカミノルタさんによれば、学力調査の結果や日々の学習上での取り組み状況を分析して、生徒ら一人ひとりに合わせて適切なメッセージを示唆する・そうです。生徒ら各人に応じたヒントや助言を適宜示しながら、担当教員にも生徒の学習状況を報告して、結果的に学校でのよりよい授業の改善などに活かせるように努める試みだとします。自治体や学校側からの教育方針や要望などを前提とした、人工生成AIによる教育指導・学習支援は、まさに教育界での始まりの段階といえるのでしょうか。コニカミノルタさんいわく、生徒らがもっと親しみやすく対話できるように、人工生成AIとの間で「たのしいことがあったね」といった雑談的な対話も行って、生徒各人の状況に応じた学習支援を構築して行きたいとありました。人工生成AIがサポート役にとどまらなくなっちゃう危険性がある?かもなど。(谷本)

5月11日に高校3年生のときに参加していた名古屋学生合唱団(略称NGG)の同窓会が開かれたので出席した。部活動や生徒会役員を引退していた高校3年生の春、名古屋大学で開かれていた高校生のフェスティバルにたまたま出かけて、そのときのこの合唱団の演奏を見かけ、友人2名といっしょに、なかば勢いで入団した。大きな声を出すのは割と好きではあったものの、それまで「どのような音楽が好きなのかもよく分からない」ほど音楽には自信を持ってない生活をしていましたが、8月の夏合宿(恵那の小学校でのミニ発表会つき)や1983年1月23日の第20回発表会(愛知県勤労会館大ホール)で、学校の枠を超えて歌う体験に恵まれた。このことがきっかけになってもう少し歌ってみたくなり、大学でも合唱団に入り、現在もその社会人の合唱団に通い続けている。

同窓会の場で、数名の卒団生が関係資料を保存していることを知り、見せていただいた。以下、その一部を紹介したい。1952年の発足以来、高校生中心の自主サークルとして、数回の解散危機を経ながらなんとか存続し、20代を中心とした卒団生のボランティアに支えられながら大きなホールでオリジナル曲もプログラム入れて開催できたのが、私がかたまたま参加した第20回発表会だったということが分かった。なお、この合唱団はその後10数年ほどで残念ながら活動を休止となったらしい。それでも、このような学校を超えた高校生の活動が40年間ほど続いていたというのは、戦後の高校生文化の歴史を見る上で興味深い事実だと思われる。

ちょうど最近、河西秀哉さんの「大学合唱団の戦後史—うたごえ運動・大学紛争・高度経済成長—」（『昭和のくらし研究』昭和館、第22号、2024年3月）を読んだが、合唱活動についての研究はまだまだ珍しいので、この名古屋学生合唱団のような高校生の動きについてとりあげている研究は、ほとんど無いのではと思われる。貴重な資料を保存してくれていた卒団生のみなさんに敬意を表したい。

<「名古屋学生合唱団第20回発表会」プログラムより>

1ステージ「レクイエム 一眠れ幼き魂(こころ)」(作詞・保富康中、作曲・佐藤真) /
2ステージ ポップス/3ステージ 全員合唱/4 合唱組曲「子ども達よ 負けるな」(作詞・名古屋学生合唱団・佐久間盛敏、作曲・佐久間盛敏)

<朝日新聞 1983年1月23日記事「踏ん張り抜いて20年 声高らかに発表会 きょう高校生、世相に批判こめ 名古屋学生合唱団」より>

同合唱団は昭和二十七年、高校生を中心に一般、大学生も加えて発足した。三十九年には高校生だけのサークルとして独立、月三百円の会費で団員たちが自主運営している。財政難などから、五十一年には団員が二人だけになったこともあったが立て直し、毎週一回の練習、年一回の発表会のほか、他高校との交流演奏会を活発に続けている。

現在、二十校、五十人の団員が学校の枠を超えて合唱の勉強に取り組んでいるが、今度の発表会は二十回という一つの節目だけに全員の力のいれようも一しおだった。

現在、二十校、五十人の団員が学校の枠を超えて合唱の勉強に取り組んでいるが、今度の発表会は二十回という一つの節目だけに全員の力のいれようも一しおだった。

当日は団員三十人のほか、先輩三十人も舞台に立つ。「子どもたちよ 負けるな」は、演奏時間三十分。団員全員で作詞し、先輩の会社員佐久間盛敏さん(二七)が曲をつけた。「人間らしく育ちたい」「落ちこぼれ音頭」、画一的な高校教育を工場になぞらえた「生産工場」など四曲で構成されている。

<中日新聞 1980年12月10日記事「歌い続けて30年 解散の危機乗り越え 名古屋学生合唱団」より>

同合唱団は戦後の二十七年、中部日本学生放送合唱団に入っていたメンバーを中心に生れた。団員の学校が離れているため、高校内のクラブ活動のようにはいかず、何回も解散しかかった。だが、機関誌を発行して、歌だけでなく、人生を語り、心を通わせる努力をし合って活動を続けた。三十九年には名大祭の「うたごえ祭典」に初参加、四十九年には自分たちの手で創作劇「遠き海原」を完成させ、盛り上がりのきっかけをつくった。三十九からは毎年、自主公演を開き、活動の成果を市民に披露、今日に至っている。現在のメンバーは、県下二十六校の高校生たち六十五人。

(富岡)

会員消息

本年5月初めの東京新聞を読んでいて、都がカスタマーハラスメントの防止条例の検討を進めている…という記事の関連で、とある区の公立小学校の改築計画をめぐる住民説明会が白熱して、計画の見直しを求める住民らの質問や要望が途切れることなく、住民説明会が予想以上に長時間化してしまい、区の担当者が「納得していない方に対して説明をすることについても、心労がともなうというところもあった」と吐露した…と拳がっていたのを読んで、正直驚きました。行政的な住民説明会が議論白熱して、結果的に長時間化してしまったのであろうと想像しますが、これがそのまま、公務員に対する過度なまたは不当なカスタマーハラスメント?に相当する…などとは考えていないはずだと信じますが。会が予想された以上に、長時間化してしまったことに対する改善措置(時間進行上の参加者間での相互確認など)は必要だと思えますが、住民説明会自体がむしる議論白熱することは健全なことであろうと感じます。住民説明会の開催に対して、カスハラ?という声が安易に挙がる…のは、いささか本末転倒で邪道な印象がしてしまいますね。(谷本)

【趣味の時間】

私は、仕事の合間に資格や検定を受けることが趣味です。いわゆる資格マニアというやつです。2024年は「司書」「介護職員初任者研修修了」「医療事務技能試験(メディカルクラーク)」などの資格を取得しました。

このように書くこと真面目な?資格マニアですが、本当は「これはいつ役立つのだろう?」と思える資格を取得することが好きです。

これまでも「カップ捕獲許可証」「全国道の駅検定」「日本化粧品検定」など一風変わった検定試験を受けてきました。

2024年5月1日時点で約120種類150個の資格等を取得しました。これからも年10個をペースに資格を取得していこうと思います。(八田)

尾原宏之氏の『「反・東大」の思想史』(新潮選書、2024年)のあまりの面白さに興奮しました。帝大(東大)に対する慶應義塾、早稲田、私立法律学校、一橋、同志社、京大の対抗をいろいろな視点から論じており、歴史研究の面白さをあらためて確認できました。慶應義塾は「ハーバード大学日本校プラン」、その一方で、早稲田は、「劣等生と落第生の掃溜め」、「レジャーランドとモラトリアム」…、早稲田出身の私も大笑いしてしまいました。

(山本剛)

去る5月15日、世田谷区北烏山にある日本女子体育大学(旧二階堂体操塾)を訪問しました。谷本宗生様のご紹介で、同大学教授で附属図書館長をしておられる瀬川大様とメールで打ち合わせをし、実現しました。拙稿「ニュースレター」第106号～第111号の「二階堂体操塾」関連の記事をご覧になってくださったのでした。

最初に、図書館2階に設置された「二階堂トクヨ資料展示室」を見学しました。トクヨさんの生い立ちからイギリス留学を経て学園創立に至る過程が、わかりやすく展示されていました。トクヨさん直筆の手紙や和歌の短冊、ノートなども多く展示され、特に印象に残ったのは、小学校時代に描いたという、「手・足」や「耳・口」の鉛筆画でした。とてもリアルに描けていて、驚くとともに、毛筆、スケッチ、和歌、文章など、トクヨさんの多才ぶりに改めて感銘しました。また、地下には国内外の舞踊関係の資料を集めた「舞踊ライブラリー」があり、さすがに”舞踊の日女体”だと感心しました。

その後、トクヨさんが大正時代に出していた個人雑誌『わがちから』や『体操通俗講話』『足掛四年』などの著書、二階堂体操塾の卒業生で、日本女性初のオリンピックメダリストとなった人見絹枝さんの著書『最新女子陸上競技法』、自伝『スパイクの跡』など、貴重な雑誌や書籍を閲覧させていただき、また、必要な個所のコピーもさせていただきました。ちょうど神辺靖光先生との共著で、「『百花繚乱 日本の女学校』女子教育史叢策大正昭和初期編」の出版の準備を進めているところですので、写真掲載の許可申請もできました。実際に雑誌や書籍を手にとると、何かしら感じるものがあり、とてもありがたく、充実した時間でした。



日本女子体育大学烏山キャンパスの体育館群(長本撮影)
とてもいい気分で、逆光のため建物の色が暗くなっています。

学園が松原キャンパスから烏山キャンパスに移転したのは、1965年ですので、トクヨさんはこの地には立っておられませんが、赤土のトラック、緑の芝生のフィールドの向こうに大きな丸窓の体育館が建っており、その窓から号令をかけるトクヨさんの美声が聞こえてくるような気がしました。瀬川様やご案内くださいました図書館職員の安藤様にとっても親切にいただき、これも「ニュースレター」がつかないでくれたご縁だと感謝しております。谷本様ありがとうございました。

(長本)

最近は、亡くなった父の資料やサークルの同窓会など、個人の日記のような感じで「短評・文献紹介」を書いています。書いてると発見もありますし、案外、研究の話題につながることもあります。仕事に追われて疲れてしまうこともありますが、やはり「書く」のは楽しいので細切れ時間も利用しながらニュースレーに執筆し、研究論文へとつなげていきたいと思います。みなさんも、「短評・文献紹介」をもっと利用されてはいかがでしょう？

京都市学校歴史博物館で、6月22日から9月16日まで、企画展「京都市における新教育の軌跡 — 京都に眠る「児童本位」の教育の世界 —」が開催されます。私としては、このテーマは見逃せません。6月29日には、同館学芸員の林潤平さんによる講演会「新教育とNIE — 京都市の教育実践の歴史を例に考える —」も開催されます（要申し込み/先着順）。次ページにチラシを添付します。チラシは同館のWebサイトでも閲覧・ダウンロードしていただけます。

<http://kyo-gakurehaku.jp/exhibition/R6/060622/index.html>

そして、前号でもご案内しましたように長野県松本市にある旧制高等学校記念館の第28回夏期教育セミナー（8月31日～9月1日）で、対面でお目にかかれたら大変うれしいです。（富岡）

第29回 NIE全国大会京都大会開催記念



京都市における

新教育の軌跡

— 京都に眠る「児童本位」の教育の世界 —



写真は右上的から時計まわりで
①第二高等小学校校舎（1918年頃）
②新発校校舎（1930年頃）
③日新校校舎（1918年頃）
④北白川校校舎（1918年頃）
⑤修道校校舎（1921年頃）

令和6年
(2024)

6月22日(土) ~ 9月16日(月・祝)

- 開館時間 9時~17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 毎週水曜日(祝日の場合は翌平日)
- 入館料 大人400(320)円 小・中・高校生150(120)円
※()は20名以上の団体料金
※京都市内の小・中学生は土曜日・日曜日入館無料



京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History



第29回 NIE全国大会京都大会開催記念

京都市における新教育の軌跡

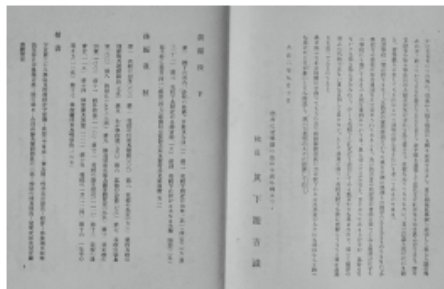
— 京都に眠る「児童本位」の教育の世界 —

「新教育」とは、狭義には子ども自身の行動や生活、関心、そして気持ちを重視した教育の取組のことを言い、日本では主に大正期、さらには戦後以降に追究が本格化した、注目すべき教育実践と捉えられます。そして実は京都市は、この新教育の歴史においても、重要な位置を占める場所であり、その結果京都市では、新教育に関する多様な実践の数々が、数多くの教師たちの手で蓄積されていくことになりました。しかしこうした京都市の教育史の大切な一面は、これまでも注目を集め、十分に調査・研究が進められてきたとは、決して言えないのが現状です。

この企画展は、そんな注目すべき教育実践の歴史と、その歴史をめぐる教師たちのドラマ、つまり「京都市における新教育の軌跡」を迎える展覧会です。

なお、本展覧会では、第29回 NIE全国大会京都大会の開催を記念して、京都のNIEの歴史に関連する史料や、NIEと新教育の関連を示す注目すべき史料などを展示するコーナーも設置します。

※NIE (Newspaper in Education) とは、日本語で「教育に新聞を」と訳される、学校などで新聞を教材として活用する活動の事を言います。



我が校及校下(真下道吉編、京都市藤田寺常小學校発行、1913年)



新教育の主張と生命 (西原)
谷本福壽、大正期、1909年



尚徳中學校新聞 新刊号(京都市立尚徳中学校報誌部発行、1948年7月17日)

関連イベント

講演会：新教育とNIE

— 京都市の教育実践の歴史を例に考える —

日 時：令和6(2024)年6月29日(土)

14:00～15:30

講 師：林 潤平(京都市学校歴史博物館学芸員)

会 場：京都市学校歴史博物館 3階講義室

定 員：50名(要申込/先着順)

申込方法

①イベント名、②参加代表者氏名(ふりがな)、
③代表者の電話番号、④参加希望人数を明記のうえ、
電話・FAX・Eメールのいずれかでお申込みください。

電話：075-344-1305 FAX：075-344-1327

Eメール：rekihaku@jigyosha.kenkyu.city.kyoto.jp

阪 急…京都河原町駅 徒歩約10分 10番出口「藤井大丸口」から南西へ

京 阪…嵯峨四条駅 徒歩約15分 3番出口から南西へ

地下鉄…烏丸線四条駅 徒歩約12分 5番出口から東へ

市バス…四條河原町 徒歩約10分 南西へ

市バス…河原町松原 徒歩約5分 北西へ

駐車場は
ありませんので、
公共交通機関を
御利用ください。



京都市学校歴史博物館
Kyoto Municipal Museum of School History



〒600-6044 京都市下京区御幸町通仏光寺下る橋南437 TEL:075-344-1305 ※水曜休館

●この印刷物が不要になれば、「贈り物」として古紙回収へ

学校歴史博物館



※正門(御幸町通)からお入りください

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。

